【議事概要】

宇宙開発委員会計画部会の設置について

文科省の池原参事官が（資料 15-１計画部会の設置）を説明したあと、以下の質疑応答があった。

青江：(計画部会の構成員の追加についての表現に注文)

池原：そうです。

井口：それでは決定といたします。座長をおやりになる青江委員から一言お願いいたします。

青江：5 年前に長期計画を策定したときから 5 年が経過し、環境が変化している。新しい計画はどこを志向し、何を押さえていけばいいのか皆さんの意見をお聞かせ願いたい。自分が今気になっていることは三つあります。

① 総合科学技術会議でも言っているように、総合的安全保障を明確にしておくことが必要と考えている。宇宙は国家的な視点で取り組まなければならない大きな事業である。平和利用原則の見直しが行われる動向の中、宇宙開発の意義の再整理・再構築が必要なのではないか。またこの結果を国民に訴えていくことが必要かと思う。

② 5 年前の計画をよく読むとちゃんと書いてある。しかし、評価はよくない。強いアピール性が無いのか、（評価の悪い理由が）よく分からない。「平板的でメリハリが無い」というのはあっていると思う。総花的でプライオリティが無い。これを改めれば良いのか。プライオリティを明確にし、アピール性を高めると、逆に縮小につながるのであろうか。

③ 重点化プログラムはあるが、政策的意図をもっとはっきり出すべきかと考える。

松尾：アピール性とは中身がアピールするかどうかという問題である。取捨選択でアピールするわけではない。技術主導からユーザー主導にしていく、また、それを可能にするインフラを整備することが重要なのかもしれない。継続性に問題があり、それに起因する問題なのかもしれない。

宇宙の魅力の一つはフロンティア性で、太陽系探査、新推進技術、など、宇宙開発自らの将来を担っている。これは利便性と並んで重要である。

野本：JAXA の長期ビジョンがそうであるように、誰もが反対をする。批判に左右されずぶれない事が大切である。「はやぶさ」のミッションを見ても、国民の誰もが興味を示す。安全・安心も大切だが、フロンティアも大事。

森尾：(宇宙開発医院になって）一年近くの印象を述べる。大型化の傾向がある一方で、科学衛星の小型化にも焦点を当てるべきである。次に、センサ技術は急速に発展している技術であり、リモセン用の応用などに注目したい。更に、ロボット技術にも焦点を当てたい。また、(宇宙の開発計画は）時間が延び、金が不足する傾向がある。逆に少なくしたら残りを弾力的に運用できるような仕組みを用意しても良いのではないか。最後に、委員の人選であるが、議論できるのはこの程度の人数であり、適当だと思う。ただし、専門をカバーできない。ゲスト委員を呼ぶとよい。

井口：予算のことが出ましたが、文部省はどうお考えでしょうか。

井田：予断できることではない。ただし、科学技術総体としては（予算が）伸びている。節度を持って事に当たり、期待に応えられる結果を出して行くことが肝要。独立行政法人は裁量権を有しているということだけははっきりと答えられる。

奈良：十分議論を深めていただき、ご指示[2]によって努力したい。

井口：一般的な組織は高い目標を掲げ、それを着実に達成するためのロードマップを描き、それを達成する努力をする。宇宙開発ではそのロードマップが明確でない。[3]これに取り組みたい。選択と集中はあったほうが良いだろう。しかし、それであってもNASAの科学予算は大きい（ので、対等に競争するのは苦しい。）また、諸外国は平和利用の組織の外に組織があって、そこで開発した技術を利用できる。総合科学技術の範囲（予算）で、科学技術から実用までカバーするのは…（難しい。）…

欲しいのは（日本の）宇宙の将来像。日本が宇宙をリードしているとは言いにくい。NASAは月・火星に重点化し、中国は有人、民が進めるのは観光、それぞれが明確にしている。「日本の国家機関技術」の議論をしたとき、コンステレーション技術、修理のできる衛星、軌道上メンテナンスなど、宇宙空間利用技術の重要性を訴えた。日本は軍事利用面で遅れているが、平和利用面では健闘している。

青江：「宇宙ではフロンティアが重点の一つ」には共感するが、国民のサポートが得られるのか不安である。

松尾：一色に塗りつぶせとは言わない。（また、NASA との共同開発のケースで）つきと火星は一緒にとは考えなくてよいと思う。

野本：アメリカでも 100%の支持を受けているわけではない。（批判意見に遮られるが、怯まず[4]）フロンティア支持の声は強く感じる。まずは知らせる努力をすることである。

井口：これから議論が楽しみですね。連休明けから…。

---

[2] ワープロは自動変換のときに「ご支持」と変換した。この方が正しいのかもしれない。

[3] ロードマップよりも「政策」の不明確なことがより大きな問題ではないか。国家戦略に照らせば、宇宙政策で宇宙の平和利用を打ち出すのが自然。そうなれば、軍事組織の宇宙予算をうらやましがるのは筋違いの議論にはならないのか。

政策のブレに気を付けるべきは、軍事組織が宇宙開発に参加しないことによる潜在的問題への対応であろう。① どのような技術の欠落が起こりうるのか。② その技術は輸入によって安定的に供給されるのか。③ それが危惧されるのであればどのように自律的に技術の維持向上を図るのか。との議論を行い、心を束ねておかなければならない。

[4] ブレの話も本件も、心強く感じる発言であると思った。